

## ■ 講座の概要

『対立から学ぼう』を活用して、ESDのスキル育成のためのプログラム・カリキュラム開発に取り組む。

## ■ ねらい

「対立は悪くない」。一人ひとり意見や経験、立場が違う以上、対立は必ず起こります。対立が悪なのではなく、対立の扱い方を知らないことが危険なのです。関係性の力は、キーコンピテンシーの一つ。ESDとしての再方向づけとしてのスキルアップを学びましょう。

今回「Active Hope」の内容を取り入れることで、ESDとして『対立から学ぼう』というスキル系のカリキュラムをどう扱えばよいかを考えることができるのではないかと考え、かなり変更を加えた。

## ■ 2日間の構造

第一日目(11/19)	第二日目(11/20)
セッション1 共通基盤づくり・相互依存 ・	セッション4 プログラム開発 ・
セッション2 流れのあるプログラム体験 ・	セッション5 アクティビティ実践 ・
セッション3 ふりかえりとまとめ ・	セッション6 ふりかえりと個人的行動計画 ・

## ■ 参考文献／使用テキスト

『対立から学ぼう』

『対立は悪くない』

## ■ 研修の記録

### セッション1 共通基盤づくり

11:00-13:00

1. 二日間の内容について
2. Active Hope のサイクルの説明
3. 「感謝」[ペア作業 3' ×2]
4. 「世界に対する痛み」[ペア作業 3' ×2]
5. 傾聴
6. 二日間の心がけ[一人で→ペアで→全体で共有]
7. ふりかえり

### 【ポイント】

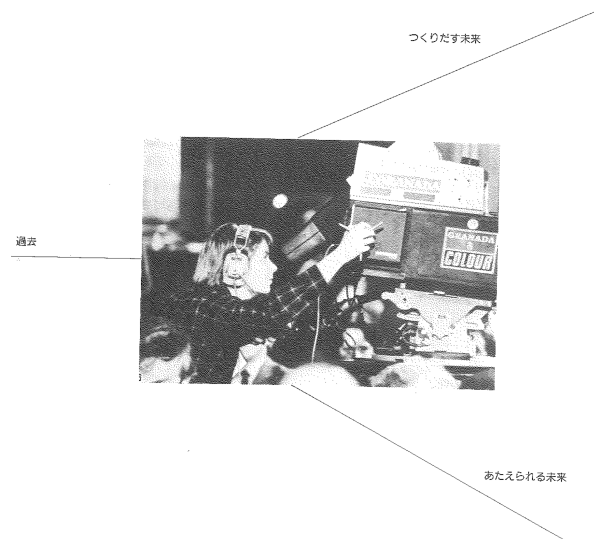
アクティブ・ホープの「どんなときにも希望を失わない生き方」は、次回の研修「未来を学ぼう」でも同じ考え方が出てきますが、「なってしまう未来」ではなく、「なりたい未来」のビジョンをもって行動するということと同じです。

1994年に出版した『テーマワーク』にもあります。

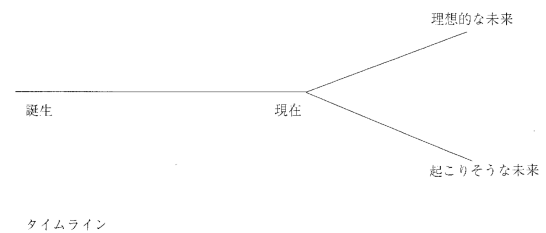
1991年に出版した『ワールドスタディーズ』にも「世界はこれからどうあるべきか「イメージの地図」」(p. 153)において、「こんなふうになったらいいな」というイメージを持つワークがあります。

アクティビティのやり方は違っても、「なりたい未来」のために行動するというのは、国際理解教育のいちばん最初からあるのです。なぜならば、国際理解教育というのは人類共通の課題に気づき、そしてその問題解決のために行動する人材育成であり、問題解決とは、いまとは違うやり方、あり方、向かう方向を含むからです。「これま

で通り」は国際理解教育の教えるところではありません。



テーマワーク、p. 91

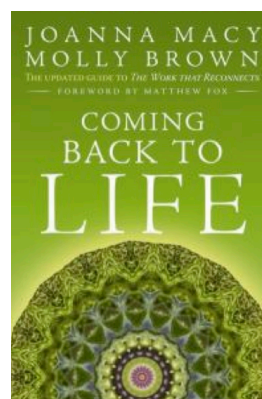


未来を学ぼう、p. 173

Work That Reconnects Network が繰り返して提示している「大転換の3つのストーリー」は、そのような批判行動は第一次元の行動だと言います。

<http://workthatreconnects.org>

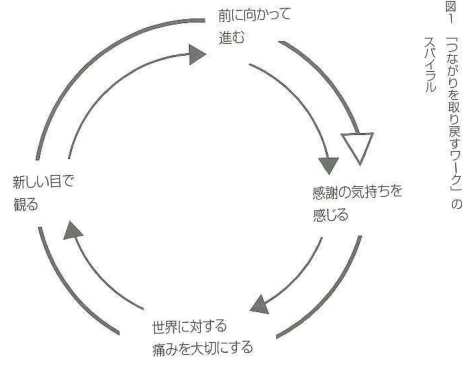
<http://ericweblog.exblog.jp/21778537/>



## セッション2 流れのあるプログラム体験

14:00-16:00

1. カリキュラムの説明『対立から学ぼう』  
『対立は悪くない』
2. 「対立」のイメージ図
3. ネガティブなイメージを変える水晶の玉
4. 対立は激化する
5. 対立の扱い方
6. 対立の場面のセルフカウンセリング
7. 対立の「怒りの温度計」(p.46)
8. 共感的傾聴
9. わたしメッセージの練習
10. 価値観を ESD で点検する。より普遍的な価値観がより普遍的な共感につながる。



『アクティブ・ホープ』 p. 11 より

大転換 第一次元 地球とそのいのちに対する損害に待ったをかける

大転換の第二次元 わたしたちの生活の基盤を分析し、改革する

大転換の第三次元 世界観と価値観の根本的なシフトを起こす

【流れのあるプログラムをふりかえる】

## セッション3 ふりかえりとまとめ

16:00-18:00

1. 対立の扱い方から学んだこと[自由記述]
2. 良かった点・課題をアダプト方式で
3. 学んだことを A3 にまとめる

導入	ポイント	課題	応用
カリキュラムの説明	学習の目的を明確にする Eduの目的の open-ended	対立の比較は難しい	対立の比較は難しい
① 対立のイメージ図	対立のイメージ図 → 自分と他人との関係性	対立のイメージ図 → 自分と他人との関係性	対立のイメージ図 → 自分と他人との関係性
② ネガティブなイメージを変える水晶の玉	ネガティブなイメージを変える水晶の玉	ネガティブなイメージを変える水晶の玉	ネガティブなイメージを変える水晶の玉
③ 対立は激化する	対立は激化する	対立は激化する	対立は激化する
④ 対立の扱い方	対立の扱い方	対立の扱い方	対立の扱い方
⑤ セルフカウンセリング	セルフカウンセリング	セルフカウンセリング	セルフカウンセリング
⑥ 対立の「怒りの温度計」	対立の「怒りの温度計」	対立の「怒りの温度計」	対立の「怒りの温度計」
⑦ 共感的傾聴	共感的傾聴	共感的傾聴	共感的傾聴
⑧ わたしメッセージ	わたしメッセージ	わたしメッセージ	わたしメッセージ
⑨ 価値観をESDで	価値観をESDで	価値観をESDで	価値観をESDで

対立についてのイメージは、やはりネガティブなものが強かったので、どうすればポジティブに観れるかを自分に贈る「水晶玉」と考えました。

- ・ 羽化すると飛べる
- ・ ちゃんと話す、消化する
- ・ 自分が見える喜び
- ・ 絶望こそが希望である
- ・ 感情的になってしまう自分に自信を持つ

## セッション4 カリキュラム開発と五つの手だて

9:00-12:00

## セッション5 バリアの克服

13.00-15.00

## セッション6 まとめと個人的行動計画

15.00-16.00

### ■ セッション4 カリキュラム開発

資料として使ったのは「わたし・あなた・みんなのスキルを伸ばすアクティビティ・リスト」と「スキルビルダー一週間月間計画表・年間計画表」。

これはいまのハンドブックに入れていない。でも、これなしではカリキュラムを考えることはできない。

スキルを伸ばすためには、1. まず自分の現在のスキルを意識化する、2. 肯定的にとらえる、3. 目標をもって習熟する の三段階があります。スキルは習熟して、活用できるようにすること。そのために、手だては蓄積的に、継続的に、そして、首尾一貫した態度で実施する必要があります。

「学校のヒドン・カリキュラム」の存在が指摘されたのは 1970 年代のことだろう。学校が唱えている理念と、現実的に教えていることや方法、そして環境全体が発しているメッセージが、一致していない。学校には「隠されたメッセージ」があると

いう指摘です。

マクルーハン「メディアはメッセージである」と言います。どのように伝えるかという媒体(メディア)そのものにメッセージがあるということです。

例えば、講義形式の授業では、教師の側が教え、学習者は学ぶという役割に固定されています。「学び合う」というメッセージにはなりません。

教科教育においては、教師は先達でありませんが、環境問題の解決においては同じ地球市民です。「共に学ぶ」というメッセージが、子どもたちの動機付けにつながります。また、現実的に社会に出た時に必要となるスキルの発揮にもなるでしょう。

伝えたいことと、伝え方を一致させること、一貫性が、教育効果につながります。

スキル習熟のための手だてには 1. 自分自身でジャーナルをつける、2. アクティビティを単発で取り入れる、3. 授業時間などを使って流れのあるプログラムで行う、4. 環境・風土を整える、5. 個別への働きかけの五つが考えられます。

ジャーナルをつけることは、『対立から学ぼう』のテキストで取り入れられていて、できれば、生徒がつけた実際の事例をとりあげて授業をすすめるようにとすら書いています。自分自身の対立のケースに、学んだことをあてはめて考えること、応用することがねらいです。

学習者の様子を見ながら、単発で短いアクティビティ、傾聴や協力を学ぶゲームなど、を取り入れることも、可能です。きちんと授業時間をとって意図的にスキル指導を行うことだけがスキルを伸ばすための手だてではありません。逆にいつも意識化できるように、ちょっとしたアクティビティを頻繁に取り入れることも効果的なのです。(ちょっとしたアクティビティのアイデアは『いっしょに学ぼう』『いっしょにできるよ』などの幼児期からできる自尊心やコミュニケーション能力を伸ばすためのアクティビティ集が参考になります。)

4番目の手だてが、さきほど言った「環境・風土全体で一貫したメッセージを伝える」ことです。学校風土全体、そして学級全体でも、自尊心を尊重しあい、ポジティブなコミュニケーション、対立を前向きに扱う姿勢が存在することがスキルの習熟をすすめます。教職員の一致した態度、コミュニケーションのあり方も含めてです。

5つめは、個別対応です。スクールカウンセリングなどもあるでしょうが、一人ひとりのニーズに合わせた働きかけは、教育の教育たるゆえんでしょう。教育は集団行動のトレーニングではなく、一人ひとりに力をつけることが目的だからです。集団は、学びと成長のために不可欠です。人間は社会的な生き物だからです。しかし、教育は集団を通して一人ひとりを育てるためのものであることを忘れてはならないでしょう。学校を離れたら、子どもたちは一人

ひとり別の人生を歩のですから。

これらの手だての必要性はあまりにも自明のことであるので、これまで分析と確認を怠ってきましたが、「みんなの頭で」再確認することが、手だての習熟につながると思います。

スキルは頭でわかっているだけでは身に付かない。それは指導者育成においても同じことだということを、幾度でも確認しないと、ですね。

### ■ セッション5 バリアの克服

どんな個人、集団、社会をめざしたいかという目標を共有し、「力の場の分析」によってプラスに働く力、マイナスに働く力を出しました。あまり元気の出る内容ばかりとは言えませんでした。それぞれに発見がありました。

人間像は... 157025  
対立は悪くはない → 対立は加

<ul style="list-style-type: none"> <li>対立を恐れたい</li> <li>対立を避けたい</li> <li>対立を前向きに扱いたい</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>対立から何かを生みだせたい</li> <li>対立をより良い結果に結びつけたい</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>自立した個人</li> <li>自己主張が強い</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>集団や社会に対する意思</li> </ul>

集団像は... 157025  
に争い  
権力と支配  
。 人心掌握技術 = 操作  
に対する 抵抗力のある 集団。

このセッションで「ゴー・フィッシュ」を

行いました。「ていねいすぎると面白くない」を実感するためです。

カリキュラムやいずれの手だても、整いすぎていると面白くない。学習者とともに作り出す余地を含んだ「半構造的」なものとして準備すること。

インプロは教育の現場にとって重要な要素です。教育は工場生産ではないのです。

## ■セッション6 個人的行動計画

ハンドブックに紹介している枠組みで個人的行動計画を考えた後、アクティブ・ホープの「新しい目でみる」ためのアクティビティ、「菩薩の心」を行いました。

このアクティビティも、とても元気をもらえるものです。

<http://ericweblog.exblog.jp/21753752/>  
わたしたち一人ひとは、この世を憂える菩薩の生まれ変わりであり、それぞれが与えられた使命を果たすために、人種、性別、両親などを選んで生まれて来たのです。

自分に与えられた条件が、それがどんなものであっても、いとおしく思えるといいですね。たった一回のワークで、これまでの見方が180度変わるとは期待すべきではありませんが、何かのきっかけにはなるのではないのでしょうか。

ジョアンナさんはこれらのワークを、いろいろな課題、さまざまな苦悩に直面した時

に、どう解決しようかと深く熟考し、生み出して来ています。その背景が『アクティブ・ホープ』にも書かれています。

日本社会には日本社会の悩みがあります。ERICのファシリテーター・ラーニング・ネットワークは、それらの課題に応えるべく、例えば『対立から学ぼう』については『対立は悪くない』というワークブックを追加的に開発してきました。また、「日本型コンフリクト」や「日本社会の○△□」という概念も発見し、その課題に応えるアクティビティも開発してきました。

米国のジョアンナが仏教の教えから学び、日本のわたしたちが米国で開発されたカリキュラムから学ぶ。

持続可能性というのは、わたしたちの地球規模での危機感の共有と問題解決のための知恵の学び合いによってのみ、実現できるのだと思います。

## ■ 今後実現したいアイデア

- 対立を扱っている絵本シリーズ
- 対立の場面を四コマ漫画にする
- 何が対立、すなわちあなた自身の自己表現や主張を抑圧するのかという視点

アクティブ・ホープを取り入れようとした理由は、「感謝」から始めるというところからです。「なりたい未来」のために努力するというのは国際理解教育、環境教育、人権教育、いずれにも共通するものですが、どちらかという現状批判やオルタナティブな選択肢を推奨しがちになってしまいます。感謝から入るのは、あまり経験がありません。

しかし、例えば現状にどれほど不満があり、課題があり、危機的な状況であるとしても、そのような認識をいま人類が持っているということ、そのような認識を生み出した社会であることを思うと、すごいことだと言わざるを得ないでしょう。

『生命40億年全史』を書いたフォーティは本の最後で、次のように述べています。

「ゲーテは「われは驚くために存在する」と語っている。,,,たしかなのはただ、この先も変化は続くということのみである。変化の原因として人間が関与することはまちがいない。,,,人間には、影響を予測することができるということだ。」

<http://ericweblog.exblog.jp/803974/>

40億年という長さの事柄を一冊の本を通して知ることができることも、いまの時代のすごいところですが、「人間が影響を予測できる」ということもすごいことです。

エネルギー・ミックスの未来などは、まさしくその「影響の予測」の実例でしょう。

地球温暖化に関しては、すでに「不可逆的な」ポイントにまで来てしまっていると指摘する人もいます。20年前にやるべきことをやっていないからです。いまからやることは、いずれ、その傾向を軽減するだけにすぎないと。

そう、未来予測には暗いものが多いのです。

アクティブ・ホープがよいところはそこです。この本の出版母体である Work That Reconnects Network が繰り返し提示している「大転換の3つのストーリー」は、そのような批判行動は第一次元の行動だと言います。

<http://workthatreconnects.org>

<http://ericweblog.exblog.jp/21778537/>

3つの次元のすべてが大転換に向かうストーリーであるのです。

**大転換 第一次元 地球とそのいのちに対する損害に待ったをかける**

**大転換の第二次元 わたしたちの生活の基盤を分析し、改革する**

**大転換の第三次元 世界観と価値観の根本的なシフトを起こす**

よく聞くことは、互いの批判し合いですが、いずれも同じビジョンの異なるあらわれでしかないのです。

同様に、ヴァンダナ・シヴァがいうパラダイム・シフトも思い起こされます。

わたしが「20世紀の三独立系碩学」として必読書にあげているのは、ヴァン

ダナ・シヴァさん、ヘーゼル・ヘンダーソンさん、スーザン・ジョージさんです。ジョアンナ・メイシーさんをそこに加えたいと、この「Coming Back To Life」を読んで思いました。

未来のビジョンを持ったり、科学技術産業社会に対するオルタナティブな取り組みを賞賛し、現状に対して批判的な表現を嫌ったり、無為であったりする。

あるいは批判することを優先し、価値観の変革には目もくれない。1970年代の学生運動の中に女性に対する抑圧があったり、批判している天皇制と同じ体質を運動団体が持っていたり。

どうすれば、これらの3つの次元の変革のストーリーを統合することができるのか。すべての行動に参画することは、限られた時間しかないわたしたちにはできないことですが、どのストーリーの大切さも理解することができるようになること。

それが「感謝」だと思えます。

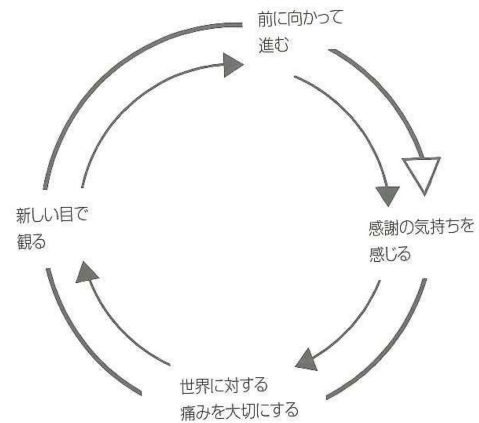


図1 つながりを取り戻すワークのサイクル

『アクティブ・ホープ』o.11より  
そして、「WTR Work That Reconnects つながり治すためにあなたができること」は「世界に対する痛み」を見つめます。

仏教学者であるジョアンナは、「他者の痛みを共有することができる」ことは強さであり、そしてそれは大慈大悲の慈悲心のあらわれだと言います。

これは「感謝」に並んで、とても力づけられるものです。わたしが世界のことに関心、他者の状況を助けるために行動を起こしていることは、慈悲心にも似たものなのだ」と知ると、とても心が満たされます。

苦しいことなのに、心づけられる。

続けようと思う。

つながりを取り戻すことの大切さを思います。